
IS RED A BULLET **赤い弾丸**

犬神毛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS RED A BULLET 赤い弾丸

【Nコード】

N8412X

【作者名】

犬神毛

【あらすじ】

主人公は一夏の親友である？五反田 弾？。

この作品は彼がもしISを使えたらというお話です。弾のヒロインにはオリジナルキャラを予定。

理由は一夏のハーレムを崩したくないという事からです。

注意 弾の性格、口調が多々違います。他の原作キャラは出来るだけ忠実に再現。あと作者は初投稿なのでお手柔らかにお願いします。

第1章 DESTINY (前書き)

はじめまして。犬神毛です。この度は読んでくださりありがとうございます。ざいませ。投稿は少々遅めですが、よろしく願いします。あとダメ出し・感想・意見常に承っております。ていつか、是非に願います。モチベーションにつながるので(笑)

第1章 DESTINY

突然で申し訳ないが、あなたは『運命』という言葉を信じたことはあるだろうか？

俺は今までそんなもの信じたことがなかった。

この世にあらかじめ決められ定められたことなど存在しない。

そう、この世の全ては偶然の産物で創られたに過ぎないんだ。

人は、それを神が定めた？運命？などと言うのが科学的根拠も論理的説明も糞もない。

そのときの俺にとってはそれがこの世界の摂理であり法則だった。

だから俺は？運命？なんて信じない。これからも俺の考えは変わらない。俺はずっとそう思っていたんだ。

IS学園1年3組。黒板の前に佇むのは1年3組担任教師こと
錦戸 蘭豹先生（さつき自己紹介をしていた）。

「全員揃ってんだろっな？それじゃあ、ショートホームルームSHRを始めんぞ。クソガキ共！！」

この人は本当に教師なのか？

目つきは鋭く髪は金髪。口調の荒々しさからも粗暴の悪さが見て取れる。とにかく怖い。まるで暴走族の集会に来ているような気分だ。ていうか、こんな怖い人がいるなんて聞いてないぞ。頼む一夏、俺を助けてくれ。

俺はそんなことを考えながら、つい？あの日？のことを思い出す。

でも今を思い返せば、あの日が俺の人生を変えた？運命？の日だったのかもしれない。

2月の真ん中、中学3年。俺は受験の真つ只中にいた。

おっと、自己紹介が遅れたな。俺の名前は五反田^{こたんだ} 弾^{だん}。

俺の実家は食堂屋を営むごくごく普通の家庭。

そんな俺は今、高校受験の会場へと向かっている。それというのも昨年起きたカニンニング事件が原因だ。受験3日前に政府の通達で各学校が入試会場を急遽変更する、という事件が起こったんだ。

ちなみに俺が受けよう思っているのは私立藍越学園。

特に何が良いかというと、私立なのに学費が安い・自宅から近い・学園際が毎年あるという3拍子。それに一夏も同じところを受験す

るといふんだ。これ以上の好条件はない。

ええっと……？一夏？というのは俺の中学入学時以来からの親友のことだ。

本名：織斑おりむら 一夏いちか。とにかく女心に鈍感で俺にとってはちょっと心配なやつである。

話を元に戻し俺と一夏は藍越学園の受験会場である多目的ホールへと向かったわけなのだが……。

建物の中に入る。中はとにかく入り組んでいて何がなんだかわからない。

例えるならそれはまるで？迷路？。いつの間にか周りには人っ子一人いない。言うまでもなく俺ら2人は迷子になってしまったらしい。

「おい、一夏。ここはどこなんだ？」

「知るかよ」

一夏の口調は少し強く苛立ちが感じられた。迷ったことに焦っているのか？まあ、わからなくもない。受験に遅刻したら事だからな。

そんなとき開き直った一夏が言う。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

でたよ。一夏のザ・行き当たりばったりが……。

でも、何故かこういう時は頼りになるんだよな、こいつは……。俺は黙って一夏について行くことにする。

すると目の前に1つのドアを見つける。

それを勢いよく一夏が開けた。

バタンツ！

扉を開けると部屋の中はとにかく殺風景。

だが奥には何かが置いてある。

それは人型に近い形をしていて、使用されるときをただ待っているかのようだ。

俺はこれを知っている。間違いない。これは『IS』だ。

『IS』。正式名称は『インフィニット・ストラトス』。

宇宙空間での活動を想定して日本で開発されたマルチ・フォーミュラーツのことだ。

だが開発者の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず持て余した力は『兵器』としての有用性を世界各国に知らしめた。

ISの驚くべきは現行兵器が一切通じない戦闘力。その圧倒的な力は現行兵器である戦車や戦闘機を遙かに上回るといふ。

しかし現在はISを日本が独占することを恐れた諸外国の働きかけでISの戦争利用を禁じる『アラスカ条約』が結ばれており競技種^{スポート}

目として利用され落ち着いている。それでも有事の際に備え、各国はISの開発を進めているのが実情だ。

だが、このISには致命的な欠陥がある。なんと『女』にしか使えない、反応しないんだ。

つまり男である俺にはなんの意味もなさない。

だから今、目の前にあるのはただの？鉄の塊？に等しいはず。

そう、少なくとも世界の常識ではその？はず？だったんだ。

それにしても何故こんなところにISがあるんだ？

おっと、くだらぬ疑問はさておき。

「どうやらこの部屋じゃないみたいだな。おい、一夏。早く引き返そうぜ。もし係員にでも見付かったら怒られちまうよ」

俺は一夏にそう促すが、どうやら聞こえていないようだ。一夏は黙ったままISに近づき何気なくそれに触れてみた。

「！？」

するとISは光を放ち輝きだした。なんと起動したのだ。あの女にしか使えないはずのISが……。一夏と俺は驚き立ち尽くす。

「ば、馬鹿なISは……おおお、女にしか反応しないはず……。まさか……お前女の子だったのか？」

「んなわけねーだろ！」

今度は聞こえていたようだ。俺のポケに一夏が冷静にツッコむ。だがその面持ちはISを起動させた驚きで呆気にとられた感じだった。でも一夏に動かさせたんだ。なら俺にも動かせるんじゃないか、と俺は思い続いてISに触れてみた。

「「!？」」

するとキンツツという金属音の音が頭に響く。そしてすぐ、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。今までなかったISの情報が理解、把握できる。知りもしないのに、習ってもいないのに、わかる。

きっと、この時の感覚は一夏と同じものであつただろう。

まさに、この日はISと出会った『運命』の日だったと今なら言える。そうさ、この日を境に全ては始まつたんだ。

その後、俺と一夏は『世界で唯一ISを使える2人の男子』として世界的ニュースで世に知れ渡った。そして世界を騒がすほどの有名な人となった。

それを聞いた各国の科学者やら企業が俺ら2人を解剖したいだの言い出したらしいのだが……。

まあ、それも当然だ。

男が何故ISを動かせたのかを科学的、論理的に解き明かしたいの
だろう。

勿論、それは言うまでもなく丁寧にお断りした。身体をいじられる
なんて嫌だし怖いからな。

そんな俺達2人を待っていたのは政府からの名目上の？保護？とい
う処理。それがこの『IS学園』に強制的に入れられた理由だ。

そもそもなんでこんな事になったか、というのもIS学園の試験会
場でISを動かしてしまったからなのだが。

ほら似てるだろ？

藍越とISって……………。

つまり、そういうこと。俺達は受験会場を間違えた挙げ句、幸運？
不運？にもISを動かしてしまったのである。

……………

……………

……………

…

で、今に至る。えーと。

状況を再確認するぞ。

今年から俺は高校1年生で入学式当日。
俺のクラスは3組。一夏は別クラス(たしか1組)。
教室にいるのは全29名の女子+(全女子から視線を向けられてい
る俺)。あと暴走族の頭ツみツたいツに恐い担任教師。
ちなみに今は自己紹介の真っ最中。

「おい、五反田!!」

「は、はい」

いきなり話しかけられ俺は驚く。話しかけてきたのは錦戸先生。

てか、やっぱりこの人こえよ。鋭い目つきは、まるで街で出くわ
したヤンキーのようだ。今からカツアゲされてもなんら不思議では
ない。

「さっさと自己紹介をしろ!!次はお前の番だ、五反田」

「は、はい!!」

驚いた!!もう俺の番かよ。急ぎ俺は言われるがままに自己紹介を
した。

「えーと、五反田 弾です。兄妹は妹が1人います。それと家は食
堂屋を営んでいますので、良かったら遊びに来て下さい」

俺はごくごく普通の自己紹介をしたつもりだったのだが何故かクラ
スは沈黙。

もしか俺は変なことを言ってしまったのか?

チラッと女の子達を見て反応を伺う。すると次の瞬間、突然女の子達が一斉に騒ぎ出した。

「きゃあああ、五反田くんの妹さん見てみたい」

「私も私も」

「いや〜ん。定食より五反田くんをた・べ・た・い」

なんだ？この以上な反応は。

まさか人生始まって以来の？モテ期？というヤツなのか？

嬉しくはあるが、若干痴女が混ざっていたのは気のせいだろうか？

「やかましい！！」

突然だ、収まらぬ女子のざわめきに痺れを切らした錦戸先生が怒鳴り声をあげた。すると女子のピンクな声援はかき消されピタリと静まり返った。

「まだSHRは終わっていない。以後、喋るヤツには罰を与えるから口には気をつける！！」

凄い貫禄。てか、凄みのある睨みだ。

だが、これでもう喋るヤツはいないだろう。これでも喋るヤツがいるというなら恐いもの知らずの勇者か魔王だな。俺はどちらでもないので黙る。

こうして、この後も張り詰め緊迫した空気のままS H R & 1時間目の授業が続いた。

IS学園。それはIS操縦者を育成する教育機関。そんなIS学園は入学初日から平常授業があるという少し変わった特殊な学校である。

で、その少し変わった入学初日の授業・1限目が終わり今はちょうど休み時間。

何故だ？休み時間だというのに俺の身体は一向に休まらない。

理由は簡単。クラスの全女子からの視線が俺に集まっているためだ。気のせいではなければ教室・廊下周辺には他クラス、他学年の生徒までいる。

被害妄想とかではなく現実問題。気疲れがハンパなくそれだけで俺はぐったりとなる。

周囲からは、女の子達の「あんた話しかけなさいよ」、「あんたが行きなさいよ」などといった話声が聞こえてくる。

たぶん良くも悪くもただ『男』である俺が珍しいのだろうな。まあ、明日にでもなれば飽きるだろ。

これが、もしモテ期というものなら俺の人生はバラ色なのだが、俺に限ってそれはないな。

例えそうだとしても俺から女の子に話しかけるなど恥ずかしくて出来るわけがない。

俺はこんなチキン（臆病）な自分が自分で嫌になる。ああ、早く彼女が欲しいぜ。

はあ~~~~と大きな溜め息をつく俺。

そういえば一夏はクラスで上手くやっているのだろうか？

いや、一夏のことだ。多分同じ状況で困り果てているのでは……？
気懸かりで心配だ。

仕方ないな、少し1組に顔を見に行つてやるか。

このクラスに居ても居心地が悪いしな。

俺は1組に行く（避難する）ことに決め椅子から立ち上がる。

そのまま教室から出ようとするが……。

そんなとき1人の女の子が軽い足取りで近づいてきた。そしてあるうことがこの俺に話しかけてきたのだ。

「ちよつといい？」

これが俺と彼女の初めての出逢いだった。

第2章 CRISIS (前書き)

多少グダグダ感が拭えませんが最後まで読んでくださると作者としては嬉しいです。

第2章 CRISIS

俺に話しかけてきた相手は金髪碧眼の女子生徒だった。

すらつとした細身なのに胸は大きいというグラビアアイドルみたいなスタイルで、ちょっとだけ目つきがキツイ印象はあるが顔立ちもやたら整っており、どこことなく気品が感じられる。

正直、かなり好みのタイプなのだが如何せん俺と彼女は全くの初対面。面識がない。

そんな俺に何故、彼女は話しかけてきたのだろうか！？

「俺に何か用か？…ていうか、誰だ？俺達って？初対面？……だよな？」

すると、彼女は涙目になって訴える。

「ひどーい！！もしかして名前すら覚えられてないの私！？ついさつきSHRで自己紹介したのにい」

すまない、聞いてなかった。そもそもあのときは自分のことで精一杯だったからな。人の自己紹介を聞くほど心に余裕がなかったんだよ。

でも、なんか悪い気がしてきたな。俺は「ごめん」と素直に頭を下げて謝った。

下げた頭を上げる。

そこには？名前すら覚えられていなかった？ことにかなりご立腹な彼女がいた。それも顔をしかめて、わずかだが頬をぷくっつと膨らませている。

(……か、可愛い)

怒っている相手に不謹慎だが俺はついそんなことを考えてしまう。彼女は不機嫌な顔付きのまま自己紹介をする。

「メアリー……。私の名前はメアリー・クライシス。おぼえてくれた？」

「ああ、クライシスさんだな。覚えた」

「メ・ア・リーー!!」

「え!?!」

「この学校にクライシスは2人いるから私のことはこれから？メアリー？って呼んで!!わかった？それと私に？さん？付けは禁止だからね」

「わかったよ。メ、メアリー。これでいいか？」

「うん、よろしい」

メアリーは俺にニッコリと微笑む。不覚にも俺はその笑みにドキドキしてしまう。

それにしても女の子を呼び捨てで呼ぶのは妙に気恥ずかしいな。

考えたら女の子の名前を呼び捨てで呼ぶだなんて？妹？と？鈴？ぐらいなものだ。

えっと。？鈴？っていうのは俺が中学時代に仲良くした友達のことだ。そういえばよく俺と一夏と鈴の3人で馬鹿をして遊んだなあ。

ちなみに鈴は一夏に惚れていた。まあ、ちよくちよくアプローチをかけていたようだが超鈍感で唐変木な一夏に気持ち伝わることもなく、確か中2の終わりに家庭の事情とやらで祖国の中国に帰ってしまった。今を思い返せば不憫で可哀想なヤツだったな。

おっと、話が逸れたな。

「ところでメアリーは俺に何か用なのか？」

もじもじ、と言いくそうにするメアリー。

「えと、良かったら後で一緒に昼食でもどうかなって思ったんだけど…」

なんだ！！ただの昼飯の誘いか。言いくそうにするから、良からぬことかと思っただぜ。

「もしかしてダメ？」

メアリーは不安げな瞳で俺を見つめる。

「いや、俺は別に構わないんだけど、なんで俺を誘ってくれたんだ…？」

「えっ…それは…その…。ほらっ、一人で昼食取るのは寂しいですよ？」

「ははは。そうか、誘ってくれてありがとな。最初はもしかして俺に惚れたのかと思っただぜ!？」

「なっ!？」

かああああ、とメアリーは顔を真っ赤にする。

「そそそそ、そんなワケないでしょ。私達まだ出逢ったばかりだし…その…た、確かに弾くんは私の好みのタイプだけど、まだそんなんじゃない…」

急にうるたえるメアリー。彼女は顔を真っ赤にしたまま俯かせた。そして何故かそのまま黙り込んでしまう。

なんだ？この反応は。ちょっと、からかったただけなのに。ま、まさか本当にメアリーが俺のことを好きとか!？」

いや…ないない。それはない。まだ知り合ったばかりだぞ。それに？好みのタイプ？とは言ったが好きとは言っていない。

うーん、メアリーの真意が気になるが。とりあえずは誤解されたまままだと後々、交友関係に響く。

「おい、メアリー。冗談だ！お前をちょっと、からかってみただけだぞ」

すると顔を俯かせていたメアリーがピクツと反応して顔を上げた。

その顔は何とも不機嫌面。そんな彼女が俺に聞こえないほどの小声で何かをぼそりつと呟いた。

「弾くんの馬鹿」

キーコンカンコンコン。

2時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「おっと、チャイムが鳴ったな。とりあえず昼食の件はわかったよ。俺でいいなら一緒に食べようぜ。じゃあまた後でな」

「う、うん」

メアリーが歯切れの悪い返事すると俺達2人は自分の席へと戻る。しばらくすると担任教師の錦戸がやってきた。

「野郎共！自分の席に着いてるな？では、授業を始める。次はISと操縦者における関係性に」

再び授業が始まる。

.....

.....

.....

……
昼休み。

やっと午前の授業が終了。俺は先ほど約束をした通りメアリーと食堂で食事を取ることにした。

ちなみに頼んだメニューは俺がニラレバ定食。メアリーがカルボナーラだった。

「うん、美味しい」

カルボナーラを頬張り満面の笑みを見せるメアリー。どうやら先ほどの不機嫌面も直ったようだ。

俺は良かったと安堵する。そして今ふと思った疑問をメアリーに訊いてみた。

「なあ、ところでメアリーって金髪だし見た感じ日本人じゃないけど出身はどこなんだ？」

「えっ、私？アメリカだけど……」

なるほど、アメリカ人だったのか。それなら納得だ。メアリーのオツパイは？メジャー級？だからな。

「ねえ、弾くん。今いかがわしいこと考えなかった？」
ギクリッ！

ジト目で俺を睨むメアリー。気のせいかな、その目は今まで見せたこ

とないぐらいに冷たい。

「き、気のせいだろ」

「なら、いいけど…」

なんとか誤魔化した但未だ動揺を隠せない俺。メアリーって結構勘が鋭いな。以後気をつけよう。

昼食を終えた俺達は教室へと戻っていった。

この後、俺達を待っていたのは午後の授業。

まあ、入学前に配布された参考書で俺はしっかり勉強していたからな。だから授業の基本的なことなど俺にとってなんてことはなかった。

放課後。

何故か俺は担任の錦戸先生に呼び出され1組の担任に会うように指示された。

担任はあんただろ。

なんで俺が1組に行かないとならない。俺は訳も分からないまま1組に向かう。

扉の前に到着。

すると良く知った声が2つ聞こえた。

……まさかな。

扉を開けると見事予感は的中してしまった。良く見知った、いや、我が親友とその姉がいた。

「ち、千冬さん!!」

俺は驚き、たじろぐ。
その瞬間。

スパアーン!

千冬さんに容赦のなく出席簿で叩かれた。

「ここでは織斑先生と呼べ!」

「はい、すみません」

先生ってことはまさかここで教師をしているのか!! 驚いた。ていうか、長年の付き合いである一夏から何も訊かされていないのだから知るわけがない。

「ゴホンツ! お前たちをここに呼び出したのは他でもない。突然で悪いが今日からお前たちには学園の寮で生活してもらうことになった」

「「はい!?!」」

同時に驚く俺と一夏。だがそれは当然のことだ。

元々IS学園は？全寮制？という決まり。だがISは事実上女にしか使えないし扱えかった。そこへISを使える俺と一夏という？男？が入ってきたんだ。突然のことで部屋割りが決まらない。だからしばらくは自宅通行を余儀なくされるはずだった。それがどうだ？いきなり今日から寮生活だというんだ。驚きもする。

「突然、困ります。なんでいきなり寮生活に？」

「政府からの特例だ！！例外は認めない。それと五反田、お前の荷物ならご家族に連絡して用意してもらった。勿論、一夏の荷物は私が用意してやった。2人共ありがたいと思え」

「……どうもありがとうございます」

この人には逆らうだけ無駄だと悟った俺と一夏は声を重ねて礼を言う。勿論その言葉には？皮肉？を込めてな。

こうして余儀なくされた寮生活が始まった。寮長である千冬さんから俺と一夏にはそれぞれの自室の鍵が渡される。

受け取ると俺達は寮へと向かった。

第3章 ROOMMATE（前書き）

今更ですが、この作品は弾を主人公にしたものです。ですが、原作とは性格・口調・思考が多々違います。読む際はご了承ください。

第3章 ROOMMATE

夕暮れ。赤く眩しい夕日が目にしみる。俺と一夏は校内から1年寮へと向って歩いているところだった。

「なあ、一夏。ところでそっちは今日どんな感じだった？クラスでは上手く馴染めているのか？」

ただ無言で歩くというのもアレだったので俺は一夏に今日の出来事を訊いてみた。それにこいつがクラスで上手く馴染めているか心配だからな。

あれ？なんか俺の発言ってこいつの保護者みたいだな。

「そうだな、今日は一日中災難だったよ。大勢の女子にジロジロ見られるしクラスでは変な金髪の女子にからまれるし……」

「……金髪？」

俺の頭には真っ先にメアリーの顔が思い浮かぶ。でも、きっと一夏の言っている女の子とは違うだろう。そもそもクラス自体が違うからな。

「へえ、その金髪の子と何かトラブルでもあったのか？」

とりあえず俺は興味本位で話を訊いてみる。

「ああ、実は今日、クラスで？クラス代表？とやらを決めることになったんだが、今言ったその金髪の女子と軽い言い争いになってだ

な……………」

どうやったたら初対面の女の子と言い争いになるんだ？

ん？そういえば、こいつは昔から変な女の子に好かれたなあ。勿論その中には？鈴？も含まれる。

「で？その後その子とどうなったんだ？」

「えっと…その後、何故か話の流れで俺とそいつがクラス代表を賭けてISで試合形式の決闘をすることに決まったんだよ」

少々暗い面持ちで話を語る一夏。

きつと不安なのだろう。というのもISを動かしたのは俺と同じでたったの2回。初めてISを動かしたあの日と入試試験の日だけだ。

それには同情すら湧いた。俺は一夏に憐れみの眼差しを送る。

「まあ、それは災難だったな。けど、試合をやるからには絶対勝てよ！」

そう言うと俺は一夏の肩をポンと軽く叩き激励した。

どちらが悪いのかは知らない。けど俺ぐらいはこいつの味方でいてやりたいと俺はそう思った。

「ありがとな、弾。恩に着る。話したら少しスツとした。不安だが、やるからには勝ちにいくぜ」

俺の激励もあってか、一夏はにこっと笑いつつも表情を取り戻した。

(これにて一件落着だな)

おっと、雑談をしながら歩いているといつの間にか1年寮に到着してしまっていたようだ。

で、寮内に入る俺と一夏は出入り口付近で別れ行動を別にした。それというのも俺と一夏は別室だったためである。

ちなみに俺が1075室で一夏が1025室。

やはり学内で、ただ1人しかいない男友達と部屋が違うのは不安なものだな。

こんなんで俺は楽しい学園生活をおくれるのだろうか？

……だが迷っていても仕方あるまい。「ハア〜」という溜め息混じりに俺は1人自室へと向かう。

「えーと、ここか。確か1075室だったよな」

俺は鍵に記された番号と部屋番号を照らし合わせ確認する。そして鍵をドアに差し込む。

(あれ？開いてる)

ガチャ。

俺は部屋に入る。

すると、そこには見覚えがある金髪碧眼の美少女が待っていた。

「やつほ、弾くん」

「メ、メアリー……!」

なんと部屋にいたのは今日知りあったメアリーだった。

それには俺もただただ戸惑いを隠せず驚く。

「驚いた？」

にこにこ、と悪戯が成功した子供のように喜ぶメアリー。

「なんでメアリーがこの部屋に……!?!それに、まるで俺がここに
来ることがわかってみたいに」

「うん、勿論すでに知ってたよ。だって私がそうしてもらえるよう
にお願いしたんだから」

一体どういうことだ?ワケがわからない。

「……………??.?」

「ふふふつ。わかりやすく説明するね。実は私のお父さんはこの
S学園の理事長さんと昔からの知り合いなの。だから無理いって
お願いしちゃったんだ。弾くんと同じ部屋にして欲しい……ってね」

メアリーはテヘツと俺に可愛い笑みを見せる。

俺はあまりの驚きで未だその場で呆けている。が、それを見たメアリーはつい勘違いをしてしまう。

「も…もしかして迷惑だった？…私と同じ部屋とか嫌だったかな？」

すでに目には大粒の涙を溜めているメアリー。綺麗な瞳をうるうるとさせておりもう泣く寸前だ。

「べ、別に嫌じゃない。ただ驚いただけだ。ほんとにそれだけだから」

慌てて否定する俺。何故か昔から俺は女の子の涙に弱いんだ。多分、女の子に甘いのは妹がいるせいかな。とにかく泣き止んでくれ。

「ほ、ほんと…？」

「ああ、メアリーと同じ部屋で俺は嬉しいぞ」

「そっか。良かった」

その言葉に安堵したメアリーは涙を拭くと再び笑みを見せる。

やっぱりメアリーは可愛いな。特に笑顔がいい。まるでヒマワリのようなあたたかい笑顔だ。今のはちょっとクサかったかな。

「メアリーは可愛いな」

(えっ！、えっ！、嘘！！今、弾くんが私のことを可愛いって…不

意打ちだよ。ヤバい！胸が苦しいよお。でも…すごく嬉しい）

あれ？今、なんか口に出さなかったか俺。

「い、今の…かわ、かわ、可愛いつてほんと？」

と顔を真っ赤に赤らめたメアリーが俺へと問う。

…や、やっぱり言葉に出てたのか！？

俺にはこういうことがごく稀にある。

ほんとに、ごく稀になるのだが思ったことをつい口にしてしまうんだ。

「いや…その…あのだな。か…可愛いと思っぞ」

「ああああ、ありがとう」

メアリーは褒められたことにお礼を言うが、横を向いたまま俺と顔を合わせようとしない。

テレビているのだろうな。俺も勢いで言ってしまったものの相当恥ずかしい。多分メアリーも同じだ。…そしてその直後に何故か妙な沈黙がおきる。

「……………」

それは互いに互いを異性と意識してのことだった。そんな雰囲気になんか耐えかねた俺はとにかくメアリーに話をふる。

「ところで、夕飯はもう済ましたのか？」

ふるふるとメアリーは首を横にふる。

「じゃあ食堂にいかないか？」

「う、うん」とメアリーは返事を返してくれるものの小声。

やはりまだ先ほどの気恥ずかしさを引きずっているのだろうか、
食事中もメアリーはほとんど喋らないままだった。

そして食事を済ませた俺達は食堂より自室へと戻る。

部屋でも変わらず妙な雰囲気が続く…が俺はそれにも馴れてきた。

まあ、それに明日になればメアリーの気持ちも落ち着いて元に戻る
だろう。ということと今日はそろそろ寝るとしよう。明日も早いだ
ろうからな。

「なあ、メアリー。そろそろ寝ないか。明日も早いし…って、あれ
？」

俺はメアリーに話しかけながらベッドの方を見てみると何故かそこ
にはシングルベッドが1つしか置かれていない。

え？どういうことだ。自室は2人1部屋のはずだ。ならベッドだっ
て各部屋ごとにちゃんと2つずつあるのが普通。

なのにこの部屋にはベッドが1つしかない。それもシングルで人1
人寝るのが精一杯な大きさだ。これは一体…！？

「し、ごめんね、弾くん。お父さんと理事長さんが私達に…その…

…変な気をつかったみたいで」

変な気ってなんだ！？変な気って……。

クソっ！！こうなったら仕方ない。

「大丈夫だ。俺は男だし床で寝るよ。ベッドはメアリーが自由に使
つていいからな」

女の子を床で寝かせるなんてことは出来ないからな。それに風邪を
ひかせたらいけないしな。

「ダメ！！」

「ええっ！！」と驚く俺。

「いや、でも……」

「えっと。ほら、弾くんが風邪ひいちゃうから」

何故かメアリーは俺が床で寝ることを断固として拒む。

「じゃあ俺は一体どうしたらいいんだ！？」

「わ、私と一緒にベッドで寝てよ」

「ななな、何！！ダメだ！ダメだ！絶対ダメ」

「な、なんで！？」

「そんなのわかるだろ。異性2人が同じベッドで一夜を過ごすだなんてダメに決まってるだろ。一般的な常識だ!!」

「じゃ…じゃあ弾くんは、もし私と同じベッドで一夜を過ごすことになったら私に何かHなことをしちゃうの!? まだ友達になったばかりなのに……!?!」

過激かつ大胆。

メアリーは言葉を言い終わると、カアアアと顔を真っ赤にした。一応恥じらいはあるようだが、言葉の端々には喜々すら感じられた。

先ほどまで恥ずかしがり沈黙を保っていた人物とは、まるで別人だ。

「何もしない。しないけど…」と俺。

「なんだ……何もしてくれないんだ」と残念そうにメアリーは、ぼそりと呟く。

「なんだって?」

俺はよく聞こえなかったから聞き返す。

「べ、別に何でもない。とにかく今日、弾くんは私と同じベッドで寝ること!! もし、言うことときかないなら明日『弾くんに襲われた』って学校中に言いふらすんだからね」

「なっ!!」

悪魔か! しかし俺にそれ以上の反論は出来なかった。メアリーの目がマジだったからな。

ていうか、何故メアリーは俺と一緒に寝たがるんだ？普通は男と同じベッドで寝るだなんて嫌がるだろう。

ついに消灯。

1つのベッドに俺とメアリーが横になる。互いに背を向けて横になっているのだが、身体（主に背中）が当たっている。それに少し狭い。

え〜と、こんな話を聞いたことはあるだろうか？

ある一つの五感が奪われると他の五感が鋭く研ぎ澄まされる場合があるという話を。明かりが消され視覚が奪われたせいなのか、今まさに俺の嗅覚は人並み以上に鋭く研ぎ澄まされていた。

メアリーの身体から甘い匂いがする。多分ボディソープの匂いだろうな。それに加えて元々あるメアリーの体臭が混じり合い絶妙な良い香りを醸し出している。

俺は変態か！！ていうか、ヤバい。変な気分になってきたぞ。そうだ、話をして気を紛らわそう。

「なあ、メアリー。起きてるか!？」

しかしメアリーから返事が返ってくることはなかった。聞こえてくるのはすーすー、という可愛いらしい寝息だけ。

寝てる!!!あんなに俺と同じベッドで寝たがっていたのに。疲れて

たのかな？だがしめた。こんな状況で寝られるわけがない。脱出だ！

俺はこっそりベッドから抜け出そうとする。

が、寝ているはずのメアリーに後ろからガシツとホールディング。捕まえられてしまった。そのままベッドに引き戻されてしまう。

俺の背中にはメアリーのたわわに実った大きな胸がギューツと押し当てられる。

俺は抱き枕か！！あああつ、メアリー。ダメだって。ヤバい、この状況は非常にヤバい。理性が飛びそうだ。

俺はなんとかメアリーの手を外そうとするが外れない。

もしかして起きているんじゃないか？と思いメアリーの腕をつねってみる。が、全く反応がない。

そこにあるのは無邪気で可愛い寝顔だけ。

(くそっ、可愛い)

結局、俺はこの日一睡も眠ることが出来なかった。そして長い長い夜を一人で過ごすことになる。

第4章 MATCH MAKE (前書き)

更新遅くてスイマセン。楽しみにしてくださっている方が1人でもいることを願います。

第4章 MATCH MAKE

AM7:20

チユンチユン……。

窓の外では目覚めを促すかのようにスズメが鳴いていた。

そろそろ学校か、と俺は一足先に支度を始めた。

そっぴや、やけに眠いな。いや…寝ていないのだから当然といえば同然か。

それというのも全ての原因はメアリーにある。

昨日の夜、俺はメアリーと一緒に同じベッドで寝ることになり寝ぼけた彼女に抱き枕にされた。

拳げ句の果てにはベッドから彼女に蹴り落とされる始末。

その痛みで完全に眠気が覚めてしまった俺は結局一睡もしていない。

メアリーめ、寝相が悪いにも程がある。

少し腹が立ったが、こんな可愛い寝顔を見せられたら怒るに怒れない。

ったく、メアリーはずるい奴だ。

でも、そろそろ起こしてやらないと学校に遅刻してしまうよな。

「メアリー、朝だ。早く起きろ、遅刻するぞ」

そう言いながら俺はゆさゆさと彼女の肩を揺すった。

するとそのたびにプルプルとメアリーのメジャー級の胸が大きく揺れ動く。

いかん、胸が！！これはダメだ。ていうか、俺には刺激が強すぎる。

俺は彼女の肩を揺するのをやめた。

「おい、起きろってばメアリー。お〜い」

だがメアリーは揺すっても呼んでも一向に起きない。

「ンン……大きなメロンパン……むにゃむにゃ」

なんだ、今の！？

もしかして寝言か？

「あはははは、可笑しな奴だな、メアリーは」

急に可笑しくなった俺は独り言のようにそう呟き笑った。そのあと彼女の頭をそつと撫でてやる。

「仕方ないな。先に行ってるぞ、メアリー。じゃあ、またあとでな」

俺は眠っている彼女にそれだけ伝えたと部屋をあとにした。

俺が向かった先は食堂。

朝食はしっかりと取らないとな。

確か朝に一番食べる方が体の稼働効率がいいと科学的にも証明されているとか、って話を一夏のやつが昔言っていた。

食堂に着くと中はすでにたくさんの女子生徒でいっぱいだった。その中から1人の男子生徒を見つける。

言わずもがな。

我が親友？織斑一夏？だ。ん？その隣には見知らぬ黒髪ポニーテールの女の子が1人。

(…………誰だろう?)

俺は疑問をよそに早速メニューを頼むと一夏のいる席に着き相席させてもらうことにした。

「おつす、一夏」

「おう、弾か。おはよう」

軽く挨拶を交わすと気になる疑問をぶつけた。

「一夏。ところで、そっちにいる子はもしかしてお前の彼女か？」

俺がそう聞くや否。

一夏が、ぶう　と口に含んでいた味噌汁を豪快に噴き出した。

その直後にゲホッゲホッとむせる一夏。

うわっ。きたねえ。
ていうか、別に嘔き出すほど可笑しいことは言っただけでもないだけだなあ。

一夏の隣では……。

「そ、そうか。周りから私たちはそんな関係に見えるのか。うむ、悪くないな。いやむしろ……」

と、頬を紅潮させたポニーテールがぶつぶつと何か呟きだした。その言葉の端々には嬉々が感じられる。

一方、一夏は……。

「なんでそうなるんだよ!! 違うぞ。ほら前にお前にも少しだけ話しただろ。こいつの名前は篠ノ之しののへ箒はらこ。ただの俺の幼なじみだ」

と、即否定。

なんだよ、面白くない。しばらくこれをネタに一夏を弄ってやろうと思っただけに。

そして次の瞬間。

一夏が顔を酷く歪めた。

何事だ! と思いき下の机の下を覗き込んでみるとポニーテール改め篠ノ之さんが一夏の足をぎゅっと強く踏んでいた。

それは見るからに痛そうだった。

「ってえっ！！何すんだよ！？箒」

そっだ、そこは怒っていいところだぞ、一夏。

俺には何故、篠ノ之さんが一夏の足を踏むに至ったかは、わからないがそこは多分怒っていいところのはずだ。

「馬鹿がいたから踏んだだけだ！！」

理不尽。理不尽すぎる。一体どこの暴君だよ。頑張れ一夏。

「お前は肉切り包丁か何かか！そんなに日常的に暴力振るっていいと思ってるのかよ！？」

え？日頃から暴力振るわれているのか？

一夏め、可哀想な奴だ。

「黙れ、もう一発いくか？」

「ごめんなさい。黙ります」

謝っちゃったよ、一夏。明らかに篠ノ之さんが悪いだろ。

もしかして、これが幼なじみというものなのか？

だがあれでは一夏があんまりだ。

ここは親友のために俺がビシッといってやるっ。

「篠ノ之さん！！」

「なんだ？」

ギロリとひきつった目で俺を睨む篠ノ之さん。

ビビるな、ひよるな、俺。一夏の替わりに言ってやるんだ。

「その……今日も天気がいいですね」

「今日は曇りだ」

言うべきこととは違った。

……………すまん、一夏。この子怖い。

朝食を済ませた俺は一夏達と別れ自分の教室に向かった。

教室に入るとすでに出入り口付近には待ち伏せていたか、のように女の子達が群がっていた。

一体何の集まりだ？

「あつ、五反田くんよ」

1人の女生徒が叫ぶ。すると、女の子達がずらずらと俺の方に集まってきた。

「おはよー五反田くん」

「ねえねえ、五反田くんさあ」

「はいはい、質問しつもーん」

「五反田くんって、彼女いるの？いないなら私が立候補」

昨日の様子見は終わりを告げたのか、俺はいつの間にか大勢の女生徒に囲まれ質問攻めにされた。

今『もう出遅れるわけにはいかないわ』とか聞こえたのは気のせいだろうか。

もしや？モテ期？襲来か？

でも全然嬉しくないのは何故だ。

それにどちらかという嬉しさより戸惑いと鬱陶しいという感情の方が大きい。

困り果てる俺。

そこへ担任教師の錦戸がやってきた。

それに気付いた生徒達は蜘蛛の子を散らすように散って自分の席へとついた。

ああ、説明するところの人はIS学園で学園1恐れられている先生な

んだ。というのもこの容姿と口調はな。普通に怖い。

ちなみに千冬さんは2番目だ。

「てめえら、授業始めんぞ。と、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

ん？そういえば一夏がそんなこと言ってたな。

「簡単に説明するぞ。クラス代表っていうのはそのままの意味で対抗戦だけではなく生徒会の開く会議や委員会への出席などを主にしてもらう。いわばクラスのパシリ。別名クラスの？犬？だな」

嫌な役職の名だ。

？犬？つて……。今のを聞いてやりたいと思う奴は間違いなくないだろう。

少なくとも俺は絶対やりたくない。

「自薦他薦は問わない。誰か推薦者は？」

「はい。五反田くんが良いと思います」

すると1人の女子生徒が俺を推薦した。

おいおい。

ちよつと待てよ。

なんで俺が！？

「はい、私も五反田くんが良いと思います」

「はい、私も」

便乗しすぎだろ。

この流れはおかしいだろ。ていうか、勘弁してくれ。俺はそんな面倒なことはやりたくない。

それに続いてクラスの半数の人間が俺を推薦することに賛成した。

そして残りの半数は何故か？メアリー？を推薦した。

なんでメアリーを？？

俺はそれを疑問に思うが、それはすぐに解決することになる。

「なるほどな。確かクライシスはアメリカの代表候補生だったな。対するは唯一ISを動かせる男子。面白いマッチメイクだ。よし、決めた。2人には来週クラス代表を賭けて試合をしてみよう」

何！！メアリーが代表候補生！？

いや、いや、今はそんなことよりも。

「ちょっと、待って下さい、錦戸先生。俺は辞退します」

「黙れ五反田。てめえ、に発言権はない。」

「いや、でも……」

断ることを試みた俺だったが……。

その先の『やりたくないです』とは口が裂けても言えなかった。だってキレられそうだから。

ちきしょう。こうなったらメアリーに助けを。

俺はメアリーのいる窓際の席に視線を向けて助け舟を求める。…が、彼女はむすっとした顔でぷいっと俺とは逆の窓の方を向いてしまった。

えええ、なんでだ！？何か悪いことでもしたか、俺？

クラスメイト達も面白そうとか、どっちが強いんだろう、といった話で盛り上がっており割とみんなノリ気な様子だ。

「では、来週の月曜日に試合を行うから2人は各自準備をしとけよ。みんなもこれでいいな？」

「はい」

生徒一同は大きな声を合わせて返事をする。

「それでは授業を始めんぞ。クソガキ共」

こうして俺はかなり不本意なのだが、俺とメアリーのマッチメイクは決定した。

第5章 PERSONAL AEROPLANE (前書き)

ども、久しぶりの人もはじめましての人もいますが、コンニチハ。
これは約1週間ぶりの投稿になります。

いや、投稿が遅かったのはプライベートが忙しい&作者の頭が残念で上手く文章がまとまらなかったっていうのが主な原因ですね。

グダグダ感は相変わらずですが、生暖かい目で見てください。

第5章 PERSONAL AEROPLANE

長かった午前の授業も終わって今は昼休み。

「な、なあ」

メアリーの席に近づき、声をかける。

というのも今朝のクラス代表の件について彼女と話したかったのだが。

「……………」

呆気なく無視された。

それもそのはず、メアリーは見るからに不機嫌面でぷいっと窓の方を向いてしまい俺とは目も合わせようとしない。

今朝のHRが終わって以降、俺が話しかけるとメアリーはずっとこの調子だ。

とにかく俺に対する態度が冷たい。

察するに俺に何かを怒っているようなのだが、いったいメアリーは何を怒っているんだ……………？

俺には心当たりがなく皆目見当もつかない。

「な、なあってば……………いったいどうしたんだよ。何を怒っているんだ？」

躊躇いつつも俺はストレートに尋ねた。

「……少しは自分で考えれば？」

彼女からはこれ以上ないくらい冷たい答えが返ってきた。

ぐおおおお、地味にツライ。冷たくされるのは蘭（妹）で馴れているのだが……。蘭（妹）とメアリー（友達）では精神的ダメージが違いすぎる。

「わ、わかった。じゃあ、そのことはもういい。そんなことより一緒に昼食食べにいかないか？」

「いやっ！！」

即答かよ。

もしや俺って相当嫌われてる？

「大体、私以外にも昼食に誘う人ならいっぱいいるでしょ？今朝だつてクラスの子に囲まれて、にやにやしてたくせに……」

メアリーはさらに顔をしかめて言った。

俺はふと思う。

ん？もしかして……。

「妬いてんのか？」

「なっ！！………」

かああああ、とメアリーの顔がみるみるうちに赤く染まる。

「違うもん。違う違う違うったら、ち・が・う」

異常反応。彼女は、「うがああ」と唸るようにそれを大きく否定した。

なるほど、メアリーってわかりやすいな。

要するに？友達？の俺が他の子と仲良くしたのが気に入らなかったってわけだな。

いわゆる？ヤキモチ？。

メアリーめ。

可愛いやつ。

「メアリー。俺はお前と一緒に昼食を食べたいんだ。お前じゃないとだめなんだよー！！」

「えっ！？」

俺のその言葉にメアリーは耳まで顔を真っ赤にしてモジモジし始めた。

そしてその照れを隠すかのように自分の髪をクルクルと指に絡めてイジリだす。

「あのね、それって私が弾くんの中でちょっと特別な存在ってことだよ……ね？」

メアリーがおそろおそろ俺に尋ねた。

特別……？

そりゃ特別だろ。IS学園で初めて出来た？友達？なのだから。

「ああ、メアリーは俺の特別な存在だぞ」

「……そ、そっか」

するとメアリーは何故か俺の顔を見つつにやにやとした。

気でも狂ったか？

「えへへっ。うん、じゃあ今回は特別に許してあげるね」

そう言うと彼女は俺に満面の笑みを見せてくれた。一方、俺は彼女の笑みが理解出来ず首を横に傾げる。

まあ、何はともあれメアリーの機嫌は直ったようで良かった。

俺はホッとひと安心して彼女と共に食堂に向かった。

食堂に着くと俺達は早速メニューを注文してそれを受け取る。

「おい、メアリー。あそこの席が空いてるぞ」

「うんっ」

ご機嫌なメアリーと俺は近くの空いている席に座った。

それにしても先ほどまで不機嫌で俺を無視した彼女がまるで嘘のようだ。

『女心と秋の空』という言葉があるがメアリーは一般の女性より気分の浮き沈みが激しいように思う。

正直対応に少し困る。

まあ、それはさて置き俺は今朝からずっと彼女に聞けなかった疑問を本人に直接訊いてみた。

「ところでメアリーがアメリカの代表候補生っていうのは本当なのか？」

「うん、本当よ。びっくりした……？」

「ああ、驚いた。メアリーって実は凄いな」

「うんうん。じゃあ私のことはこれからメアリー様って呼んでもいいよ」

「いや、それはさすがにちょっとなあ」

「冗談よ」

クスツと笑うメアリー。冗談混じりに淡々と話す彼女だが、その裏では血の滲むようなとてつもない努力をしているはずだ。

そう、代表候補生になることは実際問題それはもう凄いことなんだ。

?代表候補生?

それはその名の通り各国を代表するIS操縦者の候補生のことである。

無論。先ほども言ったが、この代表候補生になることは容易な事ではない。高いIS操縦技術と高いIS知識の両方が必要とされる。

そのうえ実際に選ばれるのはエリート中のエリートである。握りの才能ある人間のみとされている。

つまり、代表候補生とは次の国家代表を担う選ばれしIS操縦者つてことだ。

ちなみにこの代表候補生のほとんどには?専用機?と呼ばれるISが配布される。

彼らの主な仕事はその専用機の実働稼働データを取ること。メアリーがわざわざアメリカから日本にやって来たのもそのためだといえる。

「そつえばさ、俺達つて試合する事に決まつたんだよな?」

最初は担任の錦戸がほぼ強引に決めたようものだったが、面白半分にクラスメイトがそれに同意してしまい決定してしまった。

「うん、そつだったね。でも、私的には面白そつでいいと思うけどなあ。クラスの皆も楽しみにしてくれてたしね」

プラス思考が羨ましいぜ。俺は争い事とか嫌いなんだよ。

それに……。

「俺は正直嫌だな」

「なんで…?」

メアリーが首を傾げる。

「理由はどうあれ、メアリーを傷つけたくはないなって思ってたさ」

「ななななな、なに、それ!?!?!?!?!」

(う)。ズルい、弾くんはズルい。不意打ちだよ。こんなこと急に面と言われたらキュンとしちゃうよ。でも、ダメダメ。ここは心を鬼にしないと)

「ダメだよ、弾くん。もうクラスで決まったことなんだから。それとも私との勝負から逃げるの?」

「別にそういうわけじゃ…」

俺はそこで言葉に詰まった。

そうだよな。確かにメアリーの言うとおりだ。

メアリーを……友達を? 傷つけたくない? っていう言葉を立て前にして俺は勝負から逃げようとしていたのかもしれない。

「ああ、もうっ、わかったよ。試合では手を抜かない。だからメア

リーも全力できてくれよな」

「うんうん、それでこそ男の子。でもね、私だって伊達に代表候補生してないよ。それに？IS？に関しては誰にも負けたくないの。だから試合では私が勝つよ」

「のぞむところだ！俺だって負けない。やるからには絶対に勝つ」
互いを互いにライバルとして認めあった2人はしばし見つめ合う。

「あははははっ」

すると突然、メアリーが笑い出した。

「な、何だよ…急に。もしかして俺、変なこといったか？」

「うんうん、ごめんね。急に可笑しくなっちゃって。だって私と弾くんって少し似てるんだもん。弾くんって意外と負けず嫌いでしょ？」

「そうか…？そんなことないと思うんだけどな」

「うんうん。きつとそうだよ。でも、そういうアツい人…私が好きだよ」

「何だつて…？」

最後の方が小声でよく聞こえなかったので俺は即座に聞き返した。

「何でもないよ」

隠されると逆に返って気になるのだが。まあ…よしとするか。

それはそうと不安な気持ちがないわけではない。相手は天下の代表候補生。そんな彼女と違って俺は専用機持ちでもなければ代表候補生でもない。

勿論ISを動かす高等技術も教わっていないし知識だって教科書の基礎知識ぐらいしか持ち合わせていない。

こんなんで本当に試合で勝てるのか……？

俺は不安な気持ちを押し殺しメアリーとの食事を無言で続けた。

そこへ……担任教師の錦戸先生がやってきた。

俺としては出来れば授業以外でお会いしたくないお方なのだが。

「おい、五反田！！テメエ探したぞ！！」

ああ、怖い。早くこの場から逃げたい、帰りたい、立ち去りたい。

「ああん、聞いてんのか？バイクで引きずり回すぞ、こらあ」

「す、すいません。聞いてませんでした。もう一度お願いします」

バシンッ！！

担任教師から容赦のない平手打ちが飛んできた。

痛い、実に痛い。

「私の話は一度で聞け！！わかったか？クズ」

「はい、すみません。反省してます」

ああ、この通りうちの担任教師は男女問わず手をあげる暴力教師なんだ。千冬さんの出席簿でのシバきが可愛く見える。

しかも今のは明らかに暴言だ。この人、生徒に向かって『クズ』とか言っちゃったよ。

聖職者としてそこんとこどうなんだよ？

いや、言うまでもなく普通の学校なら確実にアウトだな。

錦戸が何故クビにならないかが不思議だ。きっと学校の七不思議的なものに数えられるだろう。

「えっと、ところで俺に何か用ですか？」

「用があるから来たんだろうが、もう一発イっとくか？」

「い、いえ、結構です」

俺は恐怖で身体がブルブルと震える。

「よし、じゃあ耳の穴かつぽじつてよく聞けよ！！なんと、テメエには政府からお達して専用機が与えられることになったさうだ」

「「えっ！！」」

突然のことに俺と隣にいたメアリーはひどく驚き呆気にとられた。

それも当然。一年の、しかもこの時期に専用機を貰えるなんてことはめったにないことなんだ。

なにしろ、ISは世界にたったの467機しか存在しない。その全ての中心たるコアは篠ノ之博士が作成したもので、未だ博士以外はコアを作れない状況にある。

しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っている。

つまり本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。

「何故、俺に専用機が？」

「テメエの場合は状況が状況だからな。データ収集を目的として専用機が用意されることになった。世界で貴重なISを使える？男子？という実験体。まあ、要するにテメエはモルモットだ。分かったか？クズ」

うっ。それにしても凄いやつだ。これは素直に喜んでもいいのか？

「凄いよ、弾くん。これで弾くんも専用機持ちだよ。やったね。」

隣ではメアリーが純粹に喜んでくれている。錦戸の罵倒の後だからか、彼女を見ると余計に微笑ましく思える。

錦戸先生が話を続ける。

「そういうわけだ。だが専用機の準備には1週間ほどかかる。まあ、なんとか試合当日までには用意してやるが、訓練には学園の訓練機を使用しろ！！分かったな」

「はい」

話が終わるとスタスタと錦戸はその場を去っていった。

第6章 TRAINING (前書き)

約10日ぶりの投稿になりますね。

更新遅くてスイマセン。

でも、これからもこのくらいのペースで続けたいと思います。
このペースこそが僕のベストなんです。

第6章 TRAINING

時間は放課後、場所は第三アリーナ。

すでに俺の身体にはIS（訓練機）が展開、装着されている。

そう、俺はさっそく今日から訓練を行うことにしたんだ。

それにしてもこんなにあっさり訓練機の使用許可が下りるとは実にありがたい。

ちなみにこの当IS学園の訓練機には2種類のISが用意され貸し出されている。

まず1つは我が日本のISとして最も定評のある量産型第二世代。

その名も？打鉄^{うちがね}？。

火力に少々難があるものの安定した性能を誇る防御型^{ガード}で初心者にも扱いやすい。それに付け加え整備のしやすさからも絶大な人気を集めている。

2つめがフランス製の量産型第二世代、その名も？ラファール・リヴァイヴ？。

操縦は簡易なため操縦者を選ばないうえに初期第三世代型に引けをとらない機動性重視の優れたスペックを有している。

また武器が豊富で装備に応じて全距離タイプに切り替えられるという安定型^{バランス}である。

まあどちらを選ぶにせよ、さほどの大差はないらしい。

所詮は打鉄もリヴァイヴも第二世代型だからな。

どちらも第三世代型と比べるとはるかにスペックが劣る。

で、結局俺が選んだのはフランス製？ラファール・リヴァイヴ？。

理由は単純明解。リヴァイヴの機動性の高さや武器が豊富な面に惹かれたのだ。

よし、とりあえず今日は射撃武器の練習だな。

まずは武器を展開。

高周波の音とともに、右腕から光の粒子が放出される。それが手の中で形となって姿を表した。

展開したのは55口径アサルトライフル。名は《ヴェント》。

初めて握る武器は妙な感じだ。

銃器自体はISのエネルギーフィールドがあるため重たくはないのだがなんていうか、こうズッシリとした銃器特有の存在感みたいなものがある。

俺はそれを不器用な手つきでターゲット（的）に向けて構えた。

こ、こんな感じでいいんだよな……………???

うん、多分これでいいはずだ。たしか漫画のゴルゴ13もこんな感じに銃を構えていたしな。

俺は自問自答を繰り返しながら銃の引き金をゆっくりと引いた。

バンッ！

「うおおおっ!?!」

ものすごい火薬の炸裂音に驚いてしまう。

びっくりした。けど……ヤバい。すげー、気持ちいいかもしれない。

初の射撃に感動しつつ俺はターゲット(的)の方をしてみる。

すると弾は残念なことにターゲット(的)の中心とは程遠い位置に命中していた。

いや……でも、初めてにしては良い感じだよな。

「……………お、惜しい」

その言葉を発した刹那。

突然。突然である。

ドカツ！という鈍い音と共に俺は前のめりに地面へ倒れた。

どうやら俺は何者かに背後から蹴り倒されたらしい。

いつたい誰だ……？

即座に立ち上がり俺はくるりと後ろを振り返る。

そこには同じくISを纏った女の子が長い黒髪をなびかせ立っていた。
リヴァイサ

その長い黒髪といい、顔付きは純日本人だと断定づけるものだった。

また背は高くもなく低くもなく、かなり細身。

やたら整った顔立ちは、いわゆるひとつの美少女だと思われる。

だが今、問題すべきはそこではない。

「いきなり何するんだよ！！！」

俺が怒るのも無理はない。ISを身に纏っていたため痛みはなかったものの初対面の相手にいきなり蹴り倒されたんだ。

そう、腹が立つのも至極当然のことだ。

「ふん、黙れ。この腐れ赤髪ロン毛が！！！」

「なっ！！！」

謝るところか逆に罵倒された。

しかも俺の外見的特徴を馬鹿に……。

さらに彼女は淡々と言葉を続ける。

「だいたい君が悪い。アリーナ中央で射撃訓練などと。これでは他の者が訓練出来ないではないか。それともなにか？君はここを貸切にでもしたつもりだったのか？」

「うっ……」

反論できない。

確かにそれは俺が悪かったよ。他の人が来るだなんて思ってもみなかったし……。それに他人の迷惑を考えない奴はクズだと思う。

ここは素直に頭を下げ謝っておくべきか。

「……すまない」

「ふん、わかればいい。素直なやつは嫌いじゃない。今回は特別に許してやるっ」

何故か上から目線なのが気に入らない、もとい腹が立つのだがどうやら許しがでたようだ。

「ただし……」

えっ!？

「おれの訓練に付き合ってくれ」

この子、今自分のことを「おれ」っていわなかったか？女の子なの

に？

口調といい、まるで男みたいなやつだな。

それに加えて顔が可愛いだけに妙な感じがする。

ていうか、ちょっと待て！おいおい。話がまるで見えないぞ。なんで唐突にそんな話になるんだ。

「実はちょうど訓練を共にする相手がいなくて困っていたところでな」

そんなこと俺にいわれてもな。勝手に1人でやってくれよ。

……いや、待てよ。ちょうど俺も訓練中なわけだしこいつの訓練に付き合った方が効率的じゃないのか……？

「わ、わかった。少しだけならその訓練の相手を俺がしてもいいぞ。」

「そうか、それは助かる」

彼女はにかつと微笑み右手を差し出す。

「おれの名前は錦戸にしきと 桜さくらだ。よろしく、頼む」

へー、錦戸っていうのか。担任教師と名字が同じなのは偶然だよな。いや、偶然だと思いたい。

……………まさかなあ。

そこはあえて聞かないでおく。

それにしても名前が女の子っぽいだけに口調とのギャップが凄いな。付け加え、ささやかではあるが胸の膨らみも確認出来る。

これで彼女が女の子というのは確定だ。実は俺は彼女が男ではないか、とわずかに疑っていた。

だがそれは彼女に対しあまりに失礼なので秘密にしておこう。

「俺の名前は五反田 弾だ。こちらこそよろしく」

俺も右手を差し出し彼女と握手を交わす。

「弾。では、さっそくで悪いが手合わせでもお願いできるか？」

いきなり名前を呼び捨てかよ。まだ知り合って間もないというのに。

まあ別に構わないか。

それより。

「悪いが手合わせは出来ない。俺はまだ試合をすとかそんなレベルじゃないんだ」

俺は先ほどライフルで狙い撃ったターゲット(的)の方を指差しそれを断った。

すると、桜は俺の撃ち終えたターゲット(的)付近の弾痕をジッと

見つめたあとに言う。

「なるほど。確かに射撃センサーだな。おれとは試合になりそうにない」

ぐおおつ。さすがにそも他人にきつぱり言われると傷つくな。

「では、おれが少々手解きをしてやろう。銃を構えてみる」

「えっ?」

「いいから早くしろ」

俺は慌てて先ほどのアサルトライフル《ヴェント》を展開し構えた。

「ダメだな。構えが全然なっていない」

「そんなこと言われても素人なんだから仕方ないだろ」

「言い訳はするな。腹が立つ。まず脇をしめろ。それと左肩はこっちだ」

ひよいと桜が俺の背後に回り込み、まるで二人羽織のようにして俺を上手く誘導する。

「よし、そうだ。その構えが基本体制だ。そのまま、ターゲット（的）を狙い撃ってみろ」

「ああ」

俺は《ヴェント》の引き金を引いた。

バンッ！！

火薬の炸裂音と共に弾が飛び出す。

そして弾はなんとターゲット（的）のド真ん中に見事命中した。

「うおっ！！やった、当たった、初めて当たった」

「うるさい。はしゃぐな」

はしゃぐ俺を見て、やれやれといった感じに桜は自然と口元を緩めた。

俺はというと嬉しさのあまり、つい桜の手をとるように握る。

「桜、ありがとう。最初はお前のこと上から目線でちょっとイラッとするやつだと思ったけど、実はいいやつなんだな」

「べ、別に大したことはしていない。だがお前もなかなか腕前だな。とても初めてだとは思えない。褒めてつかわす。といっても、まだまだおれの足元にも及ばないがな」

テレしているのか、桜は顔を赤くした。

「なあ、桜。ところで俺達ってもう友達だよな？頼みがあるんだが」

桜は？顔で聞き返す。

「なんだ？言ってみろ」

「実は来週の月曜日にクラス代表を賭けて試合があるんだ。まあ正直別にクラス代表とかはどうでもいいんだが勝ちたいんだ。で、俺のコーチを引き受けてくれないか？」

桜は腕を組み「うーん」と少し考え込むようにしたあと了承する。

「いいだろう。ただしおれの訓練は厳しいぞ」

「ああ。じゃあさ、まず射撃武器の特性について訊きたいんだが」

こうして強力なコーチを手に入れた俺は彼女と共に来るべき試合当日に備え訓練へ取り掛かる。

ちなみにこれは余談ではあるが、同日時に一夏は篠ノ之さんに剣道場にて剣道の稽古をみてもらっていたらしい。

ていうか、剣道の稽古って……。

うん、全くIS関係ねえじゃん。

一夏よ。どこからその余裕が湧いてくるんだ…？

今度直々に訊きたいところである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8412x/>

IS RED A BULLET 赤い弾丸

2011年11月22日04時24分発行